

ってしまして、すでに現役を去られたOB株主も強力な株主であります。OB株主の他にこれらの主旨に賛同してくださる人達があります。

このようなことで、我が校は一般社会並みの組織がきちんとできあがっています。従って会社制度ですので、倒産は絶対に許されません。幸いにして学校というのは倒産はないのです。強力な教育委員会と文部省がついていますので……。倒産しないかわりに絶対に黒字も出せない訳です。そういう点で……。子供達が株主になるのでしょうか、製品になるのでしょうか。最終目的は株券の値をいかにつりあげるか、いかにいい製品を世に送り出すかということになるかだと思います。ところがやはり会社制度でありますので、株の上下は当然ございます。去年の上半期は大変な赤字でした。三条新聞にも、倒産一步手前かという記事も載ったようですが、やや、このところ持ち直して、世の中不景気ですが、私のところは上りかげんであります。

私は職員の中の組織作りということが、いかに大事か、学校も会社と同じような組織体でありますのでやっております。赤字、黒字というのは一体どういうことなのかということですが、私は父兄の皆さんら株主の皆さんに言い訳をしたり、理由をながながと説明するようでは、会社は赤字なのだと思うのです。『いやこういうことがありました。こういったことがこの前ありました』と、結果と報告だけを端的にスムーズに言える。これが黒字であります。それらを尺度にしながら、お互いに頑張っていこうということをやっています。その点でうちの教頭社長は、非常に大変な訳であります。校内の仕事ばかりでなく、外部的なものを持っております。私の仕事は先程言いましたが社長をいかに円満退職をさせるかということです。円満退職というのは、校長に出すかと言うことになります。従って我が三中商事においでになる時は、必ず社長に挨拶しませんが、社長が鼻を曲げますと困りますから『坂口というのですが』社長と声をかけてもらえばありがたいと思います。そうした中で、会社でありますので基本戦略といえますか、経営戦略というものがなければなりません。

少し固い話になりますが、次の三点を自分の信念として持っています。

一つは総意と総力の結果です。要するに社員からアイデアが生まれてこなければならぬ、そのアイデアを元に総力をあげて取り組まなければならない。35名が総力をあげて取り組むということです。私は『25時間体制で望め、世の中の父兄も子供も24時間しか生きていないのだから、我々が25時間やれば絶対文句なんかこない。しかも人より一日一時間長生きできる。年間365時間長生きできる訳だから、一時間ずつ長生きしよう』ということを言っています。

二つ目は、先程から言っていますが、人間的なふれあいを多いに持とうということです。教育的出会いが大事です。人間そういう中で人間のふれあいを大事にしていこうということです。

三つ目は、腰の入った仕事をして辛いのは逃腰であります。腰の入った活動をしてもらいたい。

これは、固い三点ですが、私がいつもいっている社員心得は全部で九つありますが、そのうち五つだけ話をさせていただきます。

1800mへ友達4人と紅葉をめでに行ってきました。突然の大雪にびっくりとんだ雪見酒をあじわってきました。

今井克義君 情報委員会です。8月のアンケートの報告を週報に載せてあります。お読み下されば幸いです。

大野新吉君 地区大会に出席させて致き大変有難うございました。昼は大会セレモニーに感激、夜は二次会に行く迄の前橋祭りの夜店の屋台に祭り気分を満きつし、又二次会では奉仕の精神で他県の女性にことさら優しく親睦を深めてまいりました。又翌日は本当にせわしい一日でしたが実に「みのり」のある二日間を過ごしてまいりました。ありがたいありがたい。

梨木建夫君 お墓を建てたいので家紋を調べたのですが、くわしい事がわかりません。家紋についてくわしい事を知ってる方聞かせて下さい。ヨロシク、

江口悟君 ボックスに協力

石月雅司君 BOXに協力して、

石川友意君 BOXに!! 先週の夫人同伴例会当ホテルを御利用いただきありがとうございます。

ロータリー財団：

山上茂夫君 今日、土佐先生からお越し戴きましたので……。

佐藤啓策君 土佐校長先生卓話をありがたく拝聴させていただきます。

大野新吉君 各大会に出席させて致く度にロータリー財団ボックスへの協力の必要性ひしひし感じさせられます。

平松利朗君 皆様のご厚意に感謝して。

樋口金占君

五十嵐英雄君

卓 話： 『今、学校に求められているもの』

三条市学校長会会長・三条市立第三中学校校長 土佐 弘殿

『今、学校に求められているもの』というのは、大きく分けて二つあると思います。一つは学校というものはとかく閉鎖的であるという、社会から異質な存在であることをよく言われました。

父兄や地域の人も、もっと学校を開いてください。学校のことを地域に出してください。悪いことをするとすぐ学校は隠してしまうということをよく言われます。そういう点で学校というものは、地域、社会、全体に大きく開いていかなければならない。つまり出入りのある学校、銀行の預金と同じことで、出たり入ったりするところにお金のめぐりがある。入るばかりではだめ、出るばかりではだめであって、そういう点で開かれた学校ということを、これからは求めていく。それから、最近は人事異動が激しくなりました。2年、3年たつとほとんどの職員が異動します。そうい

うところからなかなか地域に馴染んでくれないという声をよく聞きます。やっと慣れてくると出て行く、あるいは新潟、長岡に自宅があるの、そちらの方ばかり帰らなければならないという気持ちがあって、三条になかなか馴染んでくれないということがあります。そういう点で、地域、保護者の期待に答えて、子供達に感動を与える腰の入った教師を育てていかなければならない。そういう学校経営をしていかなければならないと強く感じます。そういう点で『校長として何をやっているんだ、』という斎藤正さんの言葉を受けまして学校経営の一端を一つお話させていただきます。

まず、第一に『校長、おまえは何をやっているんだ』ということです。法的に言いますと二つあります。一つは公務をつかさどる。従って学校の最高責任者であるということ。もう一つは所属職員の監督をするということです。職員の職務上の上司であるということです。やっている内容につきましては、校長各学校、年齢も違いますし、経験、性格も違いますし、いろいろ肌も違いますから、内容については共通なものはありません。

私の場合は何であるかと言いますと、三つあるように思いますが、一つは職員の失敗の後始末をする。決着をつけてやるということです。例え話はいくつかありますが、年間にかんりの失敗があります。よかれと思ってする失敗でありますから、大事な経験になる訳ですが、あちこちに行って頭をさげてきます。それが、校長として非常に好きであります。部下が失敗をしてくれるということは、校長の出番を作ってくれるということでして、『おまえは校長の出番を作ってくれたな』と感謝します。出番を作ってもらいますと必ずそこに人の関わりが生まれます。『やあ、この間はどうも』と初めての方でも気軽に話ができるということです。いつも職員に言っていることは『必ず一度の失敗でやめてはだめ、同じことを二度失敗せよ』です。三度の失敗は許さないが、一度失敗したらもう一度失敗をする。もう一度挑戦してみるということは、今の若い職員に敗者復活能力をつけたいのです。人生は負けが多い訳で、ほとんど勝つことはめったにありません。従って、多いに負けて、多いに失敗をして、敗者復活能力をつけ、そして自分をたくましくするのが人生であるから、校長のためにも多いに失敗をして、私の出番を作ってもらいたいということが一つです。

二つ目は、職務上の上司でありますので、職員をよく知る、子供も知る、親も知る、このことが一番大事なように思います。従って知るということは、肩のはらない付き合いをお互いにしたいということです。

この前、私の学校の用務員が学校の脇のめったに使わない板、たくさんの生木を下ろしました。大行事もありますので、始末しなければならないのです。トラックに運ぶにはかなりの量ですので、私が若い独身の職員にグラウンドで火をつけて燃やせと命じました。彼はダンボールをいくつか持って行きまして、その上に生木をあげて燃やしました。ところが生木でありますから、燃えるはありますがありません。やっぱりそうだなと思い、私がグラウンドに行きました。タイヤがかなりグラウンドのすみにあります。これは陸上部が使うのですが、そのタイヤを二つ持って来まして、ダンボールでタイヤに火をつけました。消防署に叱られると思いながら火をつけたら、生木はタイヤがちょう

どバーナーになりますのでこれは燃えます。先程の職員は渡辺満之君というすばらしい若い職員でありますけれども、『おい渡辺君、君はまだ独身であるけれども（30歳を少し過ぎているのですが）生木に火をつけられないようでは女性の生の身体に火がつけられないぞ。』と言い『ところで結婚はどうだったかな』ということで火のまわりで話をする。気楽に付き合いができる訳です。校長室でそういう話をしたら『この馬鹿校長』と言われますが、こういう話をしてプライバシー、私的なことを話して、彼のことをかなりつつこんで、特に結婚問題について理解したつもりです。

そうこうしているうちに、3年生の男子が四階の窓から見ていまして『校長、珍しくタイヤに火をつけているな』とぞろぞろ5人ばかり来ました。その中にたまたまT君という男子がいて、この子はよく学校でも、どこに行っても、大事なものを女子に見せるのであります。これは学校内でも有名になっていました。私は実際に見たことがありませんので『おいT君や、君はやたらに全校生徒に見せているが、俺にも一つ見せてくれ、』と言いました。彼はモジモジしていましたが、慣れていましてサッとズボンを降ろしました。私はサッとものを握って握手をしました。『おい君はよく見せているようだけど、これは校長が握手をしてやったものなんだ。やたらに男の大事なものを見せるのではない。君は将来おそらく結婚するだろうが、奥さんをもらう時迄大事にしまっておけ、俺がそのために握手をしてやったんだぞ』ということで、この後彼は見せなくなったようですが、そういう気軽な付き合いをする中で職務上の上司として部下を知るということに努めています。

三つ目は、他の校長にはないと思いますが、私には何もしないという仕事があります。仕事ではない仕事と言った方がいいのでしょうか、役目柄いろいろ対外的な役職をしていますので、ほとんど学校におりません。従って、仕事を持ってもなかなかできない、仕事を持ってやれば、周りに迷惑をかけるということが多い訳であります。

学校にいる日がほとんどないものですから、何もしない、何もできない、外の方へばかりでている。それが仕事となる訳です。仕事でない仕事をやっているということが三つ目の私の仕事です。

大きな二番目で、そういう中で、いったい最高責任者というけれども、学校で何を、どういうつもりで、何をやろうとしているのかということですが、これは以前私が教頭の時から、坪谷校長先生という大校長先生がいた訳ですが、その頃から導入したもので、最近では途絶えたのですが学校へ会社制度の導入ということです。一般社会の会社を真似してみようということです。具体的に言いますと、我が校は校名を三中商事といいます。社員の組織であります。教頭が社長であり最高責任者です。教務主任が専務、実務の方での最高責任者です。この二人に社長、専務の役を与えて、一応研究上調査機関は研究主任であり、生徒指導者です。従って一般学年は社員、第一営業部から第三営業部、第一営業部が一年生、第三営業部が三年生となっています。学年主任は営業部長です。従って部のことも最高の責任をとって仕事をしてもらおうと、こういう組織になっていまして、一応株主もかかえていまして、PTAの皆さんが株主ということで、この株主も三重構造にな